



「体験版short.ver」

目次

第一話	誘惑。パイズリ奉仕	3
第二話	カノジヨとは違つ騎乗位奉仕	32
第三話	淫略の3P	59
ご挨拶		90 (59)

主な登場人物

川端亜矢子（かわばた あやこ） 二十七歳のナース。ひねくれた性格の妖艶な美女。
佐原志保（さわら しほ） 二十七歳のナース。白衣の天使と評判の金髪美人。
山本義夫（やまもと よしお） 二十七歳の会社員。志保と婚約を結んでいる。

第一話 誘惑パイズリ奉仕

梅雨が終わり、清々しい白雲が顔を見せ始めた頃の出来事だった。

内陸に位置し、人口十三万人ほどを抱える矢輪島市。

その市立病院にとある男性が搬送された翌朝のこと。

「これは入院に関する資料です。一日だけの入院に何をと思われれるでしょうが、形式的なものですのでお渡ししておきますね」

六人分のベッドが並ぶ大部屋に、澄んだ声が染みていく。

小鳥のさえずりよりも耳に心地よく、小川のせせらぎ以上に聞いていたくなる美声は、
たまたま部屋を貸し切れた男が独り占めしていた。

うら若いナースは二十七歳。

母方が欧州の血筋である影響から、ソバージュのセミロングはレモン色をしている。垂れ気味の切れ長の目、すっと高い鼻、ふっくらした牡丹色の唇。計ったようにそれらが配置された顔も同系統の端麗さなのだが、実年齢よりもずっと若く見え、二十歳前後と言っても通じるだろう。まるで朝露に濡れる白百合のようにつに可憐な看護師だった。

「了解つ。ありがとう、志保さん」

関節の凹凸が控えめで滑らかな白手指も揃えながら両手で差し出された書類を、彼も丁寧に受け取る。



一瞬、互い違いに重なったふたりの薬指の根本では、同じデザインのプラチナリングが煌めいた。

彼は、ベッドで上半身を起こした状態で書類に目を走らせる。

志保というナースはベッドのすぐ側で静かに佇み、見守っていた。

彼女のナース服は綺麗な桜色をしており、可憐な容姿を目立たせている。

そして、身体のラインを浮き上がらせるタイトな作りであることから、グラマラスな肢体の輪郭が浮き上がっていた。

高級メロンを仕込んでいそうなボリュームを誇る胸元も、うっすら桃形に盛り上がるお尻も豊満で、ただでさえ魅力的に細いウエストが際だっている。

「もう、どこを見ているんですか義夫さん」

男は夢から覚めた心地で志保と視線を合わせた。

書類を読んでいたはずなのに、いつの間にか彼女の身体を目で舐め歩いていたことに気づく。

女性の身体を視姦するなどとても失礼なことなのだが、彼女は不機嫌そうにはしていない。子供のいたずらに嘆息する母親のような顔をして、眉尻を少し下げている。

「ごめんごめん。志保さんごうじてふたりきりになるのが久しぶりだから、つい」

「……そうですね。婚約しているのにお互いに忙しくて……電話もご無沙汰で……だから、いきなり救急車で運ばれてきたのには心臓が止まりました」

アメシストの綺麗な瞳を涙の膜で揺らしながら、志保は視線を強くする。

彼女のいたいけな目を見ながら、彼はすまなそうに口を開いた。

「悪かったと思ってるよ……けど、俺も驚いた。突然、周囲がぐるぐる回りだして、気が遠くなつて……そんなの初めてだったからなあ。幸い、お医者はずただの過労と軽い栄養失調と言ってくれたし、すぐに退院できるようだし。点滴も終わったことだしね……心配させてもうしわけありませんでした」

神妙な顔で深々と頭を下げる。

「……義夫さん」

志保が顔を寄せてくる。襟切りからこぼれる乳房の体温が感じる距離だった。

瞳はますます潤んでいて、今にも目尻からこぼれそう。

牡丹色の唇は微かに開き続いていて、温かな吐息を漏らしている。

「ムラムラしているのですね？」

「えっ……？」

「だって、いくら婚約者とふたりきりと言っても、ここは病院。わたしの仕事場であり、

今のわたしは仕事着です。なのに、目で舐め回すなんて……欲求不満としか思えません」

心配し、思わず顔を近づけているのだから、気が気ではなかった。

広い襟切りから露出する上乳が、顎に当たるか当たらないかという位置までやってきている。心地よい熱感だけでなく、いつまでも嗅いでいたいミルクのような甘い香りも鼻腔

をくすぐり、下半身をムズムズさせられてしまう。

揉みしだくとどこまでも指を受け入れてくれる魅惑的な柔らかさと、感じているだけで胸がドキドキする心地よい体温が手のひらに蘇り、疼きだす。

顔面に軽く吹きかかる吐息も心地よい。規則正しく控えめに奏でられる鼻息を聞いていると、ツヤツヤ輝く牡丹色の唇が余計に魅力的に見えてきて、こちらも唇を近づけたくて仕方なくなってくる。

「あ、いや、まあ……そんな気持ちもあるけどさあ……流石に節制するよ。ここは志保さんの職場で、志保さんは仕事の中で、そんなことをしていい時ではないから……ああ、その、決してあなたとシたくないわけではないんだよ?」

喜悦、困惑、寂寥、未練。そんな感情の百面相をしつつも、婚約者のナースと視線を絡ませながら、義夫は静かに言った。

「でも、チューはするわけね」

背中を預ける壁の向こうの情景を見詰める女が、揶揄するようにルージュの唇を吊り上げる。

川端亜矢子。

第一話 誘惑パイズリ奉仕

志保の同僚のナースだった。年齢は同じ二十七歳であり、こちらも劣らぬ美人ではあるが、醸す雰囲気は妖女のそれである。

くせつ毛じみたウェーブのかかったひつつめ髪。吊り上り気味で気の強そうな切れ長の目。形よく高いがどこか高圧的な鼻。不敵な印象を禁じ得ない花びらのように肉厚な唇。横倒しの釣り鐘じみた豊胸。夜空色のガーターベルトストッキングを纏う太腿の付け根から明確に突き出たお尻。間に挟まれたウェストの括れよう。

モデルじみた美しさであり、男ならば釘付けにならざるえない官能的な容姿ではあるものの、トゲの鋭いバラを連想させる端麗さでもある。

「ここは病院で、あの子にとっては仕事場でもあるっていうのに、お盛んじゃないの……ウフフ、ほんと仲がいいのね。お互いを尊重しあって、大切に思ってるって様子が伝わってくる……そういうの、ムカつくけどッ！」

搬送されてきたのが、志保の机のフォトスタンドの男と気づき。

慈母のような同僚が、休憩中につけてはうつとり眺めているプラチナリングとペアの物をつけていると確認し。

部屋の割り当てが決まって間もなくこっさり病室に進入すると、小型カメラを仕掛けた。手の中のコンパクト大の受信機の中では、ベッドで上体を起こした彼氏に、身を乗り出してキスをする志保の姿が映し出されている。

皺一つない仕事着を着ているナースは、職場であるにもかかわらず恋人とのキスに目を細めている。かすかに聞こえてくる吐息は女の自分が聞いても背筋が落ち着かなくなる艶喘ぎだった。クチュクチュという粘い水音は舌を絡め合っている証左だろう。

「あゝあ、誰からも好かれるおナース様が、病室で幸せそうにキスしちゃって。い〜けな
いんだいけないんだ」

奥歯を噛みしめると、ギリリという醜い音が小さく響いた。

病室棟の端なので、通りかかる者はまずいない。志保もそのことを考慮して、右へ左へ
顔をずらし、キスを続けているのだろう。なんて狡猾な！

「ウフフフフ……ぶち壊してやるわ……その幸福を……！」

亜矢子は志保が気に入らない。

どんな時も、癒すような笑みを絶やさず、仕事ぶりも申し分のない美人ナース。

誰が見ても、自分が見ても、白衣の天使と言いたくなる女と同じ空気を吸っていると
意識するだけで反吐がでそうになる。

彼女に落ち度はない。

自分にだけ態度を豹変させるといふ不公正なことをするわけでもない。他人に説明すれ
ば、どうしても気に入らないのかと首をひねることだろう。

しかし、気に入らないものは気に入らないのだ。

壊したいという気持ちは心の底から湧いて沸き立つ本音である。

そんな気持ちを抑えるつもりなど毛頭なかった。

パチンツ……がさこそ、カパ。

亜矢子は受信機を置いて仕舞つと、別のポケットからコンパクトを取りだして自分の容

姿を確認した。

「オーケー。いつも通り美しいわね、私は……好きになった男には何故だか好かれない美貌に変わりはないわ」

自嘲気味に呟いて、無理矢理笑顔を作る。

胸をトキメかせてくれた男に言い寄っても、成就したことは一度もない。

始まりは高校時代。記録は更新継続中。

一方で、好みでない男にはよく迫られる。

カラダ目当ての男ばかりが。

仕事や生活で利用できそうなので、セフレ関係はもっているけれども。今も妻子持ちの医者になだり、少しの暇をもらっていた。あのメタボ中年は、多少のごたごたがあっても、泊まりがけの旅行を約束すれば都合のいい風に動いてくれる。

「さあ、楽しい時間の始まりよ」

亜矢子はルージユの唇を蛇のように舐めた。

「失礼しますー」

人畜無害な仮面を顔と声帯に張り付けながら、何食わぬ顔で扉をくぐる。

病室の出入り口である引き戸は基本的に閉じることはない。

だからノックがなくても異常ではないのだが、志保は驚いた風にベッドから離れた。

「あら、どうかしたの？」

「いえ、亜矢子さん……患者さんの顔に埃がついてしまして……」

恐らく唾液の糸だろう。唇の舌から顎にかけて、一直線にキラキラしている。よく見ると、唇とその周囲数ミリの範囲も鈍く煌めいていた。

（キスをしていた癖に埃をとっていたなんてね……患者さんや新米たちに陰でババアって呼ばれる私なんかと違って、女神様とか言われている志保さんも、いやらしい嘘をつくものねえ）

内心で汚く笑い転げるのをおくびにも出さず彼女を見る。

「そう。ねえ、佐原さん。江子田さんがナースコールであなたを呼んでいるの。行ってくれないかしら。あのお爺さん、あなただけに懐いているでしょ？ 私たちが言ってもいい顔しないから。ね？ ここは私がやっておくわ」

「わかりました。すみませんがよろしくお願いします」

婚約者の義夫と、引継ぎの亜矢子にペコリと頭を下げると、志保はナースシューズを鳴らして出て行った。

「さて……私は川端亜矢子です。山本義夫さんですね？」

用意してきた用事で邪魔者を追い払うと、上体を起こしている彼に微笑を見せた。男を骨抜きにするため、練習に練習を重ねている妖艶なスマイルだ。

「は、はい……」



彼もあつさり術中に嵌まり、ウブな小学生のように顔を赤くする。

(ふうん、結構カワイイじゃないの)

歳は自分や志保と変わらないだろう。

首の後ろまで髪を伸ばした顔は純朴そうに見える。いかにも、倒れるまで仕事しそうな真面目なタイプであり、厄介ごとを背負いたがりそうな顔でもあった。

緑色で生地薄い患者用パジャマはところどころ張っていて、肉体が引き締まっていることがわかる。身長は百八十前後だろう。自分や志保より少し高い。

(アッチ方面はどうなのかしら。ガツガツしそうには見えないけれど……こつこつこの、草食系って言うんだっただかしら?)

値踏みを一瞬で終わらせると、今度は視界の隅に入って気がついた風を装い、枕元の棚に置かれている入院資料に目を走らせる。

「書類の説明はまだのようですね。それから始めましょうか」

「あ、はい……よろしくお願いします」

亜矢子は、入室前にしていたシルバーフレームの眼鏡を畳み、ナース服の胸元の合わせ目に引っかけた。

資料を読もうと言う時に眼鏡をとるなど奇妙な行動ではあるが、

(フフ、かかってくれたわね)

義夫は瞬きも忘れて胸元を熱視してくる。

眼鏡は、男の大好きな部分に視線を誘導する小道具だった。女体のラインを浮き上がらせる純白ナース服の襟切りは、谷間どころか上乳全体が確認できるほど大きく開かれている。押し合いながらムツチリ盛り上がる様子も、境目の濃い影も丸見えだった。欲求不満の男は息を吞んで見続けて、目を逸らす気配はまるでない。

「まず、当院では……」

看護師が入院について根絶丁寧に説明するなど、まずありえない。

隠しカメラで見えていた限り、志保もその慣例通りにしようとしていた。

彼はそんな不自然さには気を留めない。咎められないことをいいことに、婚約者の同僚の胸元に見入っている。

(悪いわね志保さん。あなたの恋人、私を視姦するのに夢中よ)

爽やかな朝に新鮮な空気を浴びている風な清々しさを覚えながら、気に入らない同僚の顔を思い浮かべる。

(けど、彼が悪いんじゃないわ。私が魅力的過ぎるのよ)

自分は美貌を保つため、化粧品にもエステにも、時間とカネをつぎ込んでいる。

男好きするポーズや仕草も、雑誌や本を買って研究し、練習している。

カラダ目当ての男とばかり縁のある身だが、それは美しさを示す勳章。牝としての魅力に溢れている証左でもある。見えない証をじゃらじゃら身につける自分が本気で落としていかかっているのだから、なびいても仕方ないのだ。

「説明は以上です……………あ、やっぱりまだですね。保証人欄は後で構いませんので、これにサインをお願いできますか？」

そう言つて、放置されている書類の中から入院承諾書を選び取る。さりげなく胸元の眼鏡を外して脇に置いてから、この時のために持参したバインダーに挟めて渡す。

身を乗り出し、逆さ吊りにした肉釣り鐘を前後にゆっさゆっさ揺らしながら、鼻に触れるか触れないかの距離まで生の上乳を寄せてやる。

志保の天然臭と違い、清涼系のミルクの香水臭がプンとくゆる。乳肌が放つ心地いい熱波、柔肉の存在感も彼の顔に浴びせられた。

勿論、計算済みの行動だった。

興味を誘導させた胸元をたっぷり見せた後、乳房の魅力をさらに意識させれば、いやらしくペニスを勃たせ始めるだろう。

「ああ……………は、はい……………」

圧倒されている風な掠れ声で返事をし、彼は子供のようにコクコク頷く。

（見てる見てる……………触りたい？ 舐めたい？ 顔を埋めて匂いを嗅ぎたい？ あなたも、他の男たちみたいに私のオツパイを楽しみたい？ あんな綺麗で性格もいい婚約者がいるあなたも、目の前にコレを出されたら欲しくなるわよねえ、ウフフフフ）

保証人欄が後でもいいなら、本人欄も今でなくていいのでは。

そんな簡単な疑問を口にすることもなく、彼はペンを走らせる。

大胆な襟切りから覗く、見るからにスベスベで、アルプスの雪のように輝き、触れていやらしいことをしたくなるムツチリ膨れた上乳をチラチラ見ながら。

(いい子ね。もうそんなに欲情してくれるの)

視界の端で盛り上がるものを認めると、胸中で忍び笑いしてしまう。

義夫の上体は起こされているが、下半身には青いタオルケットがかけられている。病院の物ではないし、家族が見舞いに来てもないので、恐らく志保が用意したのだろう。

それが、こんもり縦長に隆起していた。

婚約者が折角用意してくれたタオルケットに、淫らな皺をつけてしまっている。

(いいわよ、私と浮気しましょうね……倒れるまで頑張って仕事をして……けど、欲求不満だったのよねえ……私が癒してあげるワ)

「あつ、すみません……」

文字通り踊っているサインの書類を受け取とろうとした瞬間、偶発的を装い取りこぼす。薄っぺらい紙は、作戦通りひらひら股間に落ちていった。

「キャッ……」

紙の行方を目で追って、初な乙女のように小さく悲鳴を上げる。

顔を両手で覆いながら恐る恐る指を広げ、こわごわ見ている演技を行う。

「うあああ、す、すみません、すみません!」

初対面の女であり、婚約者の同僚でもあるナースに恥ずかしい勃起ぶりを認められ、彼

は真つ赤な顔をブンブン下げた。

「い、いえ……私も看護師ですから……男性の生理は存じておりますので……悲鳴な
んか上げてしまつて、むしろこちらの方が申し訳ありません」

しおらしく頭を下げ、書類に手を伸ばす。

丁寧に脇に追いやると、今度はタオルケットをゆっくり剥ぐ。

「うえ!? な、なにを……!」

「ああ……こんなに腫れ上がつて……ずっと我慢してらしたのですか?」

「い、いや……その、最近溜まつて……看護師さん、川端さんでしたか? ……あな

たが魅力的でしたから、反応してしまつて……お恥ずかしいです」

婚約指輪の手をあたふた泳がせながら、つつかえつつかえ弁明する。

「……そうですか。私のせいで申し訳ありません……責任を取らせてください。私は

患者さんを癒すナースの端くれですし、生理反応で苦しむ男の方は見過ごせません」

恥ずかしげに視線を逸らしながら、胸元を留めるボタンを外す。

焦らすように、ゆっくりとだ。

内心では、獲物が畏にかかった喜びで小躍りしているが、それはおくびにも出さない。

恋人がいながら他の女に欲情する男を思う存分責め立てたい衝動が沸き立っているもの

の、これまでの人生で養つてきた自制心で抑えつける。

男好きするしおらしい仮面は脱ぎ捨てない。獰猛な本音を剥き出しにするのは、頃合い

を見計らってからで十分なのだ。その時に本音を解放するのでも、思い出すだけで濡れてしまつゾクゾクする背悦は十分貪れるのだから。

いきなり本性を出して計画を水の泡に導いてしまつては意味がない。じっくり注意深くことを進めるべきである。

「う……………あ……………ゴクツ……………」

タイトなナース服を左右に開かせた。舞い散る花びらを刺繍した漆黒のハーフカップブラを取り去つて、瑞々しい豊胸が転げさせる。

「タップンツ！ ブルブルブルブル……………！」

磨き抜いた豊胸は、抑えつけられていた弾力を発揮して、解放された喜び一杯に跳ね回つた。やがて開き気味に落ち着いて、谷間の奥の胸板を薄く見せ始める。

きめ細かい雪のような乳肌。上乳は鎖骨と急勾配を描いていて、ほとんど垂れていない。

横乳は腋のラインから丸くはみだし、下乳は丸い美曲線を描きながら前方へ突き出ている。

さよならを言いながらそつぽを向き合つ乳輪も乳首も鶉色だった。どちらもバストに丁度よいサイズであり、後者などは朝露で濡れたグミのように瑞々しい。

美人婚約者がいながら欲求不満の若い男は、硬直して見ほれている。鼻を犬みたいにヒクつかせているところを見るに、衣服の中で醸造された肌の香りと汗の匂いのブレンド臭が届いているらしい。他の男にも好評な媚薬的な香りは、この男の興味も引いている。

「私のオツパイ……………気に入っていただけましたか？」

欲望の熱視線を、裸乳房で受け止めながら問う。

少しだけひんやりした朝の大气で乳肌に清涼感を覚え、彼の目つきで気に入らない女の男を夢中にさせる暗い喜びを感じつつ、阿る風に眉根を寄せて彼を見詰める。

「あ……………つく……………え、ええ……………すぐく素敵ですね……………はあ、はあ……………」
息が確実に荒らいでいる。

緑色の病院。パジャマの肉棒が、ビクビク前後に震えていた。

欲情サインを隠すことも忘れ、彼はただただ見入っている。

「よかった……………では始めますね。山本さんはじっとしているだけでいいですから……………全部、私が済ませます……………」

ニッコリ微笑みかけ、そのまま嫌な顔一つせず下着ことズボンをずり下ろす。

ブルンッ！ブルルルル……………！

「あんっ……………ああ……………すごい……………立派なものをお持ちですね」

衣服の拘束から解き放たれるや否や、欲情の勃起が飛びだした。

振り子のように前後に何度も振幅した後に斜めに落ち着く。だが、恥ずかしそうに、いやらしいことを早くされたそうに時々総身を震わせている。

「はあ……………はあ……………ありがとうございます……………んっ……………」

彼はせわしなく呼吸をしている。薄生地。パジャマの胸元は、一時も休まず隆起と沈降を繰り返していた。だいたい興奮しているらしい。初対面の女の前で性器を露出する恥ずかし

さはあるはずだが、それも見られる快感に変じているのかも知れない。

（ふうん、なかなかすごいじゃない……………大人しそうな顔をしているのに予想外ね）

長さは二十センチ弱だろう。太さは指三本分はある。ナースの細指ではなく、ゴツゴツした男の指でだ。

皮がすっかり剥けた亀頭は赤黒く、それなりに女壺を掻き回す経験を重ねているのを窺わせた。粘膜でツルツルし、窓の陽光を反射しながら鈍く輝く様子には、いやらしく胸がざわめいてくる。

竿部もココアパウダーをまぶした風に薄く黒ずんでおり、幾本もの太い血管がドクドク脈打っていた。見ていただけで腔奥がじんわり火照ってくる光景に、思わず吐息が乱れてしまう。

ぶら下がる陰囊も、見るからに量感たっぷりで、精子がたんまり貯蔵されていそう。精力の強い男は好みなので、思わず口に唾が溜まる。

恥毛がないのは志保の趣味だろう。お願いしているのではなく、性格を察した彼が合わせているのだと思う。あのウブな娘に、原初的な男の姿を受け入れられる度量があるとは考えられないし、剃毛してくれと言っている光景も想像できない。

「この素敵なオチンポを、私のオツパイでご奉仕しますね」

「やっぱりお、オツパイで……………ぱ、パイズリですか……………！」

ベッドの縁の下で跪きながら、両の横乳を軽く掴み、両開きの窓のように胸元を開く。

身を乗り出して裏筋と谷間の底を密着させると、乳房を自然な定位置にゆっくり戻していく。

「う、うああっ！ くう……これ、これすすすぎるっ……くうッ！」

なかなかお目にかかれない美巨乳に、欲望ペニスをガッチリホルドされた状態で、義夫は腰を跳ねさせた。

「うふ、私のオツパイ、気持ちいいのですね？」

「ああ、はああ、は、はいっ、川端さんのオツパイ、最高です、んああ、こんなの初めてだあッ」

互いに押し合いムニリと上がる上乳から露出する亀頭の先は、気持ちよさそうに何度も震えている。

ペニスの根本から先端までが、カアツと熱くなっていた。

包み込む乳肌は容赦なく欲望の化身に吸い付いて、火照った体温を擦り付けてくる。

中央の牡肉塔に向かって横乳をグイグイ押されている圧迫感は、ふしだらな性感帯全体に甘ったるい痺れを発生させていた。

志保の乳房とは違い、指で少し押しただけで容赦なく跳ね返してくる弾力であり、まるでゴム鞠に潰されている気にさせられる具合だった。一度味わっただけで覚えてしまい、病みつきになりそんな魅力を孕む逸品と言える。

第一話 誘惑パイズリ奉仕

（あッ、挟み心地は悪くないわ……んっ、すごく熱くて硬くて、オツパイの肉を跳ね返し

てくる……なかなかいいじゃないの、んっ……待つて、今この男の言ったこと……）
 ペニスの心地よい感触を胸板と内乳一杯に感じながら、気になったことを口にする。
 「パイズリは初めてなのですか？」

ブラジャーのカップのように横乳をガツチリ掴みながら、乳房を根本から前後左右に捏ね、熱り立つ逸物を揉む風に扱いてやる。すると牡棒は嬉しそうに総身を震わせ、興奮の淫熱を高め出した。

「ああッ！ は、はいっ……パイズリなんて、AVとかでしか見たことなく、経験したかったんですけど、されたことなくて……ああ、はああっ、初めてですっ！」

婚約指輪の手指でベッドを掻き篦りながら告白してくる。

快感に後押しされた必死な言い方といい、こんな時に嘘を言っても仕方がないことを考えるに、きつと真実だろう。

（そうなの……ウッフ、私がパイズリ童貞をいただいちゃったのね……あの大人しそうな志保じゃあ、確かにこんなことはできないわよねえ）

グニツ、ムニイツ……むにゅむにゅ……ずりゅずりゅりゅ……。

裸になっても釣り鐘型を保つ弾力乳房をひしゃげさせながら、強く緩く、早くのろくペニス扱き責める。

揉みくちやにされる肉棒は、どんどん硬度を上げていて、いやらしいビクつきをやめようとしてない。

第一話 誘惑パイズリ奉仕



「どうです？ 初めてのパイズリ……気持ちいいですか？」

「気持ち、いいですっ……！ ああ、すごい、くうッ！」

「んっ、んっ……山本さんのオチンポ、私のオツパイの中で暴れています」

「き、気持ちよすぎて、っ、っいつ、ンンああ……！」

「腰がクイクイ何度も持ち上がって、とってもいやらしいですね……んっ」

「川端さんのオツパイが、あつたかくて、モチモチしてて、すごいからです……はあ、

はあ、素敵なオツパイでパイズリされて、アア、幸せです！」

焦点の合っていない目で、雪肌巨乳に揉み込まれている分身の姿を見詰めながら、婚約者のいる男ならば口にしてはならない淫蕩な本音を暴露する。

その口は、つい先ほど恋人と会話を言い、キスマまでしていた口だというのに、他の女にパイズリされる快感を平然と吐露してしまっている。

トロオ……。

「ん、ンッ、あ……フッフ、とっとう先走り汁が出てきましたね……」

パンパンに張りつめた亀頭の先に濁った滴の玉ができていた。しかしそれも一瞬で、揉み込まれる振動に蹴り飛ばされ、亀頭の表面を伝い、肉棒と乳肌の接着面に降りていく。

「んふう、ペロっ……ンン、美味しいです、山本さんのお汁、とってもいい味……ペロッ、んく……」

先走り汁は、パイズリ快感で搾り出される風に、後から後から湧いてくる。ルージュの

唇を大きく開けて、熱い吐息を吹きかけながら舌先で掬い、口内でじっくり味わうと、口の中一杯に塩辛さと生臭さが満ちていく。

（味もいいわ……コツチの方もオトコオトコしてるじゃないの……ああ、ほんのちょっと飲んだだけで、何だか酩酊しちゃう……）

「もっと出してください……私が、舐めて上げますから。精液を出してもいいですよ、チユツチユツ、ペロペロ」

首を傾げ、肉穴にキスを降らせながら、こんこんと湧いてくる射精の先触れ汁をたっぷり味わう。

（んん、やっぱり、悪くないわ……ああ、それにオチンポのこの硬さも熱さもいい……オツパイで感じていると興奮しちゃう……あふ、こんな男、誘惑して利用するだけだとばかり思っていたのに、思った以上に楽しませてくれるじゃないの、チュ、チュ）

身体が淫らに火照ってきて、膣の奥がたまにキュンと収縮する。

遊び半分だった誘惑パイズリだったというのに、心を込めて奉仕したくなってくる。

たっぷり感じさせて、一杯精液を吐き出させたいという淫蕩な感情が心に広がり、その衝動に従いたくて堪らない。

「ほら、もっと感じて、オチンポびくびく震わせてっ……私のオツパイマンコいいでしょ？

射精してもいいのよ？ ため込んでいたのなら、全部受け止めてあげるから」

ジユブル、ニユジニユ、ズリユリリリ……ニチニチ、ニチャニチャ。

胸を捏ねてペニスを揉みくちやにするだけでなく、床に膝立ちになっていた下半身も伸び縮みするバネのように上下させる。膝立ちする全身を使ったアクションで、ひつつめ髪をフワリフワリたゆたわせながら、パイズリ奉仕を加速させていく。

とめどなく伝い落ちていく先走り汁と、舐める拍子に口の端からこぼれる唾液がペニスと乳肌の接地面の潤滑油となり、淫乳摩擦はなめらかなになる一方だった。

「うあああ、だめ、ですよ……んっ、はあ、はあ、精液は……初対面の女性にパイズリされた上に、射精するところまで見せるなんて……くうツ、そ、それに俺には婚約者が……アア、そうだ、婚約者がいたんだ……なのに、俺は……！」

濁りを濃くするカウパー汁。包み込む乳房を根本から揺すぶる風に、生命力に溢れたのたうちを披露するペニスの様子。もうじき射精するのは明らかだった。

浮気者の肉棒は、蕩けるような快感の固まりになり、根本から押し寄せる精液の解放衝動が気持ちいい苦しみに拍車をかけている。

（今更自分のしでかした不貞に気づいても、やめてやるものですか……終わらせるとしたら、思い切り、みっともなく射精させてからよ）

しかし、この期に及んで 男が最も快樂意外のことを考えられなくなるこの時になって、自分のしていることに気づいたらしい。

ベッドシートを握る婚約指輪の手のひらは、皺を一層濃く刻んでいる。汗を滲ませ、歯を食いしばっているのは、婚約者への義理立てだろう。

他の女との性交渉で果ててしまわないよう頑張ろうとしている、強い意志の籠もった仕事に見えた。

ゾクゾクゾクゾクゾクゾクウウウー！

（はあああ、興奮するわっ！ この、射精を嫌がる男にドビュドビュさせようとしている感じ……婚約者のことを考えて欲望を抑えようとする男に、情けなく射精させるカイカン）
性欲に従ってここまで来てしまったけれども、最後の一線だけは守ろうとする健気な姿勢は、どうしようもなく興奮させた。心臓がドキンドキン早鐘を打ち、腋の下や内乳にネツトリした汗が溜まる。

（その正気、私のパイズリで打ち砕いてあげる！）

「ウフ、婚約者に義理立てしているんですか？ 耐えようとしても無駄ですよ……んっ、はあっ、だって、私のオツパイの魅力の方が強いんですから」

ムチュツ、ムニユチュツ！ ムニチムニチ、グニユル！ ニチヤ又チユ！

「アアア！ そんな激しくされたら出てしまっ……ああ、出ちやいます！」
パイズリされる股間だけでなく、下半身全体が粘り強い痙攣を起こしていた。

「あなたはされたいのに、恋人さんはパイズリしてくれないのですよ？ される時に楽しんでの方が得じゃないですか、はあ、んんっ、ほらあ、私のオツパイで、溜まっていた精子をビュウビュウ出してください、んんっ」

「ああ、でも、彼女に……志保さんに、悪いっ……こんな、あの人の同僚と、浮気みたい

なこととして、射精までなんて、うあああつ」

「はあ、こんなにオチンポガツチガチにしているのに、他の女のオツパイに抱きしめられて、先走り汁を舐められて、オチンポの先っぽにキスまでされたのに、射精しなければセーフなんて都合がいいですよ、私はもう、あなたのカウパーちゃんの味も、亀頭のプリプリ感も、勃起オチンポのサイズも硬さも熱さも重さもわかってしまっているんですよ？ パイズリ気持ちいいって言葉だって、忘れてませんかっ」

「だ、だめですッ、全部忘れて、ください……ああ、ダメだ出る！ くうッ、裏切りなのに、射精してしまっ！」

容赦のないパイズリ快感を叩き込まれ、何度も弾んでいた腰が、一際大きく跳ね上がった。尻がベッドから浮き上がり、太腿が硬く硬直する。

「そんな都合がいいこと、通るわけがないでしょう？ ほらあ、いいのよ、さあ、出してえっ、恋人以外の女に、思い切りドロドロ口精液をかけちゃっていいの、あ、あ、あ、遠慮することはないのよ、んんッ！」

と、歯を食いしばっていた彼の顔が弛緩して、視線を彷徨わせ始めた。

半開きの口から舌がはみだし、犬のようににはあはあ息を吐くだけになる。

密着する裏筋が胸板に逞しい脈動を伝えてきた。

隙間なくホールドされたペニスの総身が、乳肌に向けたたましい痙攣振幅を刻みこむ。

（観念したようね。パイズリの快楽には勝てないと諦めて、受け入れることにしたんだわ

……フフ、やっぱり私の……このオツパイの勝ちじゃない。どんな男も私のパイズリの前に跪くのよ……！)

上乳からはみ出る亀頭の先が膨れ上がったと思った瞬間、間欠泉のような勢いで黄ばんだ粘液筋が迸った。

ドビュ~~~~~！ ビュルルウウツ！ ドグ~~~~~！

ため込んだ精液は、パイズリ童貞を奪った女の顔を一直線に汚し、天井間近まで駆け上がった。

むせかえってしまいそうな生臭さと、氷も瞬時に溶かしてしまいそうな熱さ、片栗粉の溶かし水のような粘りを持つ汁は、後から後から噴き上がる。

ナースキャップの頭にも、艶やかなルージュを引いた妖艶美顔にも、婚約者を持つ男の精液が降り注ぐ。

「ハアアア、ううツ！ んおおオツ！ てる、出るっ、出るううツツ！」

精液の具合から察するに、半月以上はため込んでいたのだろう。マゾっ気の強い外科医に命じてそれ位禁欲させた後に見た汁を彷彿とさせる。

繁殖盛りだというのに久し振りに射精を味わう若い男は、何度も腰を跳ね上げ、背筋をのけぞらせ、婚約指輪の手指でベッドシーツを掻きまみりながら、快楽の噴出を継続させた。

ギョツと目を閉じ、白い前歯をこぼしながら奥歯を噛みしめる顔はどこまでも無様で、屈服させた実感を強めてくれる。

満足感たっぷりの嗜虐心は、彼をもっと苛めたいと思わせて、射精させるための淫乱行為に駆り立てた。

射精中のペニスを胸で扱き、新しい汁の噴出を促してやる。無理矢理搾り出そうとしていると、触れられてもいない膣がカアツと熱くなっていき、子宮口が物欲しそうな疼きを示す。

「いいわ、あー、臭くて最高の精液いっ！ もっと出していいのよ、婚約者でない女に、欲望をぶっかけてえ！ ああンンン！」

ほんのり頬を上気させながら、嗜虐的に目を細め、ルージユの唇に飛んできた精液を舌舐めずりで味わう顔を彼に見せる。迸った嬌声は艶めかしいが、快感で弱った被虐的な叫び声ではなく、相手に対する優越感をたっぷり含んだサディスティックな声だった。

射精するペニスに激しいパイズリを続けながら顔や頭で射精を受け止めるのは、すごく清々しく、同時にドロドロした悦びを感じさせてくれた。

相手が恋人のいる男、このパイズリ奉仕による射精が、気に入らない女を傷つける計画の第一段階の成就を意味すると思つと、軽い絶頂感を覚えて心地いい目眩が起こる。

「はあ、はああ、ああ、出るう……………こんな、ああ、志保さん、ごめんっ……………俺、気持ちよくて……………ああ、パイズリの快感に、負けてしまって、んおおっまた出るっ」

硬さを失わない牡分身は、未だに胸でグニグニ揉まれている。胸責めで搾り出された風に、新しく噴き上がった精液が、粘っこい水音を出しながらまた厚ぼったい朱唇に付着し

た。

（フフ、まだよ……これはまだ序の口……パイズリよりもイケなくて気持ちのいいことをしてあげるわ……浮気の快楽をたっぷり教えてあげる……）

胸中で約束し、唇の精液を舐め取る亜矢子。頬を染めてうっとり瞼を下ろすと、今度は背筋をぶるりと震わせた。

そして、彼が惚けているのをいいことに、タイトスカートの中の股間にこっそり指を向かわせる。指の腹で疼く秘裂を擦りながら、ほんの少しだけオナニーをする彼女であった。

第二話 カノジョとは違う騎乗位奉仕

「山本さん、昼食をお持ちしました」

昼もよく晴れていた。網戸の窓から吹いてくる風は生ぬるいが、初夏のものにしては爽やかな方。ベッドに横になっていれば眠ってしまいそうな心地よさでもある。

「あ……どうも……ありがとうございます」

ベッドで上体を起こした義夫は、居心地悪そうに、照れくさそうに頭を下げた。

（フフ、婚約者でもない私にパイズリされた上に、後始末まで綺麗にされたことを意識しているのね……カワイイわあ）

今朝のパイズリの後のことが思い浮かぶ。射精まで導いた後、口でペニスを清拭した記憶だった。彼は婚約者に悪いから、風呂もシャワーもしていない身体だからやめて欲しいと口走っていたが、積極的に跳ねのけようとまではせず、されるがままになっていた。

だから、他の男にするよりも、根絶丁寧に舐めてやったのだ。

なるほど、パイズリしている時には気分が高揚して気づかなかつたのだろうが、しゃぶり清めていると濃縮された汗と垢の臭い、味が鼻と舌に襲いかかってきた。思い出しても、普通の女ならばとても堪えられない臭気であり、慈愛の固まりである志保も怪しいだろうというレベルに思える。

それだけに、微笑みすら浮かべて始末してやると、彼は顔を真っ赤にしつつ、ペニスも

ギンギンに勃起させて喜んでくれた。第二ラウンドもできそうではあったが、仕事があるからとはぐらかし、お預けを食らわせてやったが。

これまで、きつと罪悪感を覚えているのだろう。

婚約者がいるのに他の女に夢中になった負い目。

しかし、義夫の目には期待感めいた感情も仄見える。

彼の眼差しには覚えがあつた。セフレの男たちが自分とセックスしたがる時の目と同じで、望めば抱ける女を見る目だ。

女ならば隠すべきオツパイを、しかもとびきりの美巨乳を惜しげもなく晒してくれた。盛大にぶっかけられても嫌な顔一つしなかつた。汚らしい自分の分身を天使の笑顔で淫らに舐め清めてくれた。そんな牝に胸の奥では心を開き、欲望をぶつけたがつている目つきにしか見えない。

(まだ良心は強いようだけれど、強引に押しつけて気持ちよくしてやれば、自分から腰を振り始めるでしょうね)

ベッドの上に置かれたプラチナ指輪の手のひらを一瞥し、胸中でほくそ笑む。

「今朝のパイズリ射精でお疲れでしょ？ 私が食べさせてあげますね」

並んで伸ばされている、タオルケットの太腿に盆を置く。

「え、あ、いや、一人でも食べられます」

「遠慮なさらずに。さあ、あぐん、です」

献立は、ミニサイズのラーメン、鯖の味噌煮、ほうれん草のゴマ和え、ご飯、牛乳。退院間近の患者用のメニューと同じだった。その内のほかほかご飯を、自前の割り箸でとってやり、口元に近づける。

義夫は困った風に眉根を寄せていたが、すぐに目を見開いた。

箸の下に手を添えている亜矢子は、胸の谷間をひけらかしている。

重力に引かれ、熟れ頃の柿のように鎖骨から実っている上乳に釘付けになり、彼はゴクリと唾を飲み込む。

「ほおらあ、手が疲れてしまいますからあ」

恋人に阿る女の声で催促する。眉目を緩く八の字にするのも、「助けると思ってあ〜んしてください」という意味を込めたジェスチャーだった。自慢の乳房を見せつけて意識させるのも含め、自分のペースに引き寄せる作戦なのだ。

フルン……フルンフルン……。

ベッドの側面に腰掛けながら、彼に向かって身を乗り出し、軽く身体を揺する。

胸板と乳房がほとんどくっつく距離だったので、重たげに揺れる胸元は、彼のそこに軽く何度も触れている。蕩けるような乳肉の弾力を味わってから数時間しか経っていないので、意識せずにはいられないだろう。

「は、はい……あ〜ん……もぐもぐ」

彼はとつとつ口を開けた。美巨乳をチラチラ見ながらご飯を受け入れ咀嚼する。

「美味しいですか？」

「むぐむぐ……ぐくっ……はい……美味しいです」

「よかったです。それでは、今度はこちらを」

今度はミニラーメン。適当に箸にとる。

「少し熱いですから冷ましますね。ふーっ、ふーっ……」

厚ぼつたいルージュの唇を尖らせて、麺からくゆる熱波をゆらめかせる。

「うわああ……」

(見てる見てる……私は唇にも自信があるのよね)

婚約者のいる若い男は、突き出しては戻るツヤツヤの朱唇の動きに見入っていた。恋人の志保も綺麗な唇をしているが、彼女の場合は少女の清楚さの比率が高い。

しかし自分は反対のタイプ。艶めかしい印象が強い色ツヤであり形だった。加えて、塗っているルージュは過度に瑞々しさを強調する一品で、ツヤツヤプルプルんにしてくれる業物。この唇だと、女遊びに長じたセフレらもしきりにリッププレイをねだってくる。

「もういいでしょう。どうぞ、召し上がれ」

フォークでスパゲッティを食べる風に巻き、空いている手を下に添えながら差し出すと、今度はすぐに頷いて、彼は大きく口を開けた。

「美味しいですか？」

「あむうん……はい、とつても……」

「よかったです」

練習に練習を重ねた婀娜っぽい笑顔を向けると、彼は照れくさそうに頬を赤らめた。

(順調ね……もっと心を開いてもらおうよ……それからたっぷりやらせてあげる)

手抜きなく下拵えをするコツクの心地で、恋人同士の食事を進める亜矢子。

メニューをすべて食べさせた頃には、彼は積極的に口を開く風になっていた。そして、最後に残った牛乳も。

「んく……ん………」

「え……そ、それは………」

打ち解けてきた義夫だが、骨張った頬を赤くして困ったように目を細めている。

亜矢子は、テトラパックの牛乳をほんの少し口に含んだ状態で顔を寄せ、キスするよつに指で示していた。口移しで飲ませてあげるといふ仕草だ。

彼はなかなか乗ってこないが、タオルケットの股間はギチギチに隆起している。

(本当はやりたい癖に恥ずかしくて……度胸のない男ね)

いい加減息が苦しくなってきたこともあり、仕方なく自分から唇を押しつけた。

「んっ……んん………」

プルンプルンの厚唇の感触を体温ごと擦り付けながら、男の硬い唇を押し、舌で隙間をこじ開ける。

ようやく観念したのか、彼は抵抗を示すことなく受け入れた。

(ほら、舌を絡めてあげる。あなたもするの……婚約者でない女の舌に巻き付いてきなさい……)

唇の合わせ目の端から少量の牛乳をこぼしつつ、口内のそれを流し込むと、朝には亀頭の先を舐め回した舌を男の舌に絡ませる。

「んフウ、れるちゅ……んんっ……はむう、チュプ、ジユブブブ……!」

能動的に動こうとしない彼の肉帯に、螺旋状に巻き付いてねぶる。引き寄せて舌ではんでは下品な水音を奏でながら吸い上げ、口内に移ってきた唾液も躊躇なく飲み下す。

「はあっ……山本さんも舌、絡めてくださいよ……私にだけさせる気ですか、んむっ」

なかなか能動的に動かない男に、ベッドの上でしか使わない媚び声でおねだりする。

時々、熱くなってきた鼻息と呼気を意識して顔に浴びせ、肌と似た爽やか系ミルク臭たつぷりの蒸気も嗅がせてやり、興奮を煽ってみた。

「オチンポこんなに勃起させているのに……中途半端でやめたらもやもやしますよね？」

若いんですから、今朝のアレだけで枯れてないでしょう？ おしゃぶりフェラしたら力チカチになってくれましたし。だったら、もっと楽しいことをしまししょうよお」

タオルケットを剥ぎ、ズボンの穿き口からしなやかな手のひらを進入させ、熱く猛っていた肉棒に指を絡ませる。

「ああっ……だ、だめ、ですよ……」

彼は口では抵抗するが、積極的にやめさせようとはしなかった。

それをいいことに、蹂躪を継続する。

指に感じる熱感はいままで火傷しそうな位だった。鉄の芯が入った風な硬化具合は、すぐにでも子作りセックスできそうでもある。

（朝あんなに出したのに、まだまだ射精し足りなさそうだわ……………ああ、手で触れてみるとやっぱり素敵なオチンポね……………これを志保も味わっているの……………大人しそうな娘だけど、これに貫かれてどんなみつともない喘ぎ顔を晒しているのかしら）

他の女のものであるはずの肉棒を弄べる優越感と、逸物自体の意外な魅力に胸をときめかせながら、なめらかな手指と手のひらで勃起を直にさすり続ける。

「ううっ……………この手……………すごいっ……………はあ、はあ……………ッ」

手入れを怠らない女の手は、絹のようにスベスベしている。間接の出っ張りが控えめで凹凸が少ないのも愛撫される甘美感触に拍車をかけ、ペニスは何度も恥ずかしく震えてしまふ。ひんやり冷たい触感も、熱くなる一方のペニスには快感だった。ナース服をそつなく着こなす亜矢子の手淫は、彼の肉棒をどんどん快感の固まりにしていく。

力を込めた指先で勃起を撫で、時には力を抜いて軽く表面だけを擦り上げる。敏感な亀頭は焦らす風にしてみる。触れるか触れないかのタッチでさすっていると、肉棒全体が焦れつつに震え出す。

「か、川端さん……………んムツ、ジユブブブブー！」

「あん、いいわ、それでいいの……………チュッ、チュルル、一緒にいやらしいキスをしましょ

う？ ここにはふたりきりなのだから、遠慮することはないわ、ンン」

ペニスを甘く弄られて、我慢の限界がきたらしい。

婚約者のいる男は遂に、誘惑女とディープキスをし始める。好きでもない女の舌に、恋人の舌と触れあつたであろうそれを絡め、積極的に口を吸い、唾液を口内に流し込む。

亜矢子も熱烈に応え、やりたい盛りの恋人同士みたいな淫乱キスを繰り広げる。

空いている手は彼の手に重ねていた。婚約指輪をしている部分を執拗に指先で撫で、金属リングとゴツゴツした指肉の感触を連続して味わう。

嫌いな女の男を寝取っている。その意識が、策略上しているだけのキスと手淫にもセックスの悦びを覚えさせ、身体が少しずつ火照ってくる。

(ようやく盛り上がってきたわね……もっともっとその気になりなさい……)

キスを続けながら、ズボンの穿き口の端に両手指を引っかけ、下着ことずり下ろす。

彼は一瞬驚いた風だが、足と腰を持ち上げて協力してくれた。

押さえがなくなり勢いよく斜めに振り返った肉棒をそつと握り、空いている手は再度婚約指輪の手のひらに重ねる。彼は目を細めただけで、抵抗らしい抵抗はしない。

シユツ……シユツ……シユツシユツ……。

「ムチュツ、オチンポ硬くて熱くて素敵よお……ん、ああ、奉仕のし甲斐があるわあ、チユツチュ」

プリプリの唇の感触を他の女の唇に擦り付け、舌を絡め合つ快感を与え続ける。

その一方で、射精させるつもりで勃起を抜く。

男が自慰をする風に力強く、無毛の根本から皮の終端のカリの直下までを磨き上げ、ナースの手のひらで手淫される悦びを刻みつける。

「んおっ……あ、チンポ、感じるっ……ンンン、口も、お、はあああ、ハアアッ」

火傷しそうな熱感が雪肌の女の手に伝わる傍ら、力加減の強弱をつけて扱かれ続ける肉棒は蕩けるような快感で一杯になっていた。竿の芯まで焼き付いている風な快美で満たされて、根本の奥からドロドロした衝動がこみ上げてくる。

時々腰が跳ねてしまうのも、ピーンと肉棒全体が突っ張るのも心地よい。すぐにでも射精したい気持ちと、もっとこの悦楽を味わいたいという浅ましい欲求がせめぎ合い、自然と歯を食いしばってしまっ。

婚約者にしか見せるべきでない情けない表情を、会ったばかりの女、それも恋人の同僚に晒してしまう間違いを犯してやめようとしな。

トロトロトロおおお……。

「うふ、出てきた出てきた……いやらしいお汁が出てきたわあ」

気持ちよさそうにビクつく穂先から、先走り汁が溢れてきた。亀頭の表面に沿って細い流れをつけ、巧みに扱きたてるナースの白手に垂れていく。

手のひらと竿の間にどんどん粘り汁が絡んでくることで、ペニスの摩擦音は泥濘を歩くような卑猥な水音へ変貌していく。

「あなたの先走り汁で滑りがよくなってきたわ……どう？　ヌルヌルシコシコされて気持ちいいでしょ？　隠してもだめよ、だってあなたのオチンポを握っているのは私なのよ？　オチンポのこのギンギンぶりは気持ちよくて堪らないって感じよねえ」

「うああっつ、んんっ、くうッ……アアア、はい、はいッ……気持ち、いいです……ああっ、で、出そう……精液、出そうですッ！」

唇同士を唾液の糸で結ばせながら、亜矢子は嗜虐的に細めた目で彼を見詰める。

視線を泳がせる男は、焦点の合わない目をしていた。はあはあ情けなく喘ぎながら、今までキスしていた唇と、自分の勃起ペニスが扱かれ続ける様子を交互に見ている。

だらしなく弛んだ表情からは、快感に抗う心は読みとれない。このまま身を委ね、牡の本懐を遂げたいと、気持ちよく射精したいというふしだらな欲望成就を願っている。しか思えなかった。

（ウフフ、もうすっかり欲望の……私の虜という感じね……でもまだよ、もっと墮としてあげる。婚約者がいる男のすることじゃないことに駆り立ててあげるわ……聞いた志保が、立ち直れないショックを受ける位にね）

胸中で汚く口角を吊り上げると、優越感たっぷり目に目を細め、童貞を圧倒する年上女性の顔をする。

「精液出るのね？　射精したいのね？」

「は、ハイッ！　あああ、出したいです、このまま射精したいですッ！」

「そう……でもだめよ。射精させてあげない」

「ええ……！」

顔をくしゃくしゃにして非難がましい声を上げる彼。

その様子を見るに、自分が婚約者以外の女に射精させてとねだっていること 知った恋人が傷つくであろう裏切り行為に没入している事実、気づいているとは思えない。

自分に夢中になっているのを実感し、牝としての満足感で胸中を妖しくざわめかせながら、亜矢子は身を引いた。

だらしなく大股開きになった彼の足下にすつくと立ち、ナース服の胸元へとゆっくり手を伸ばす。先走り汁でヌラつく指先で、胸を押し込めるボタンを外していく。

ブチン……ブチン……ボロロロン！ ブルルル……ブチッ、ブチ……。

「あ……ああ……」

「見て……私のカラダ」

「うっ……ゴクッ……」

「じっくり視姦していいわよお」

「は、はい……」

「うふ、欲望に正直な男ってえ……私大好きなの」

ボタンが外されると同時に転げ出て、一緒にブラのワイヤーも弛められたお陰で半脱ぎ状態となった豊胸を目の当たりにし、結婚を誓った女がいる男はゴクリと唾を飲む。

下乳に引っかかる程度に張り付いている、舞い散る花びらが刺繍された黒レースのハーフカップブラに包まれる乳肌も、露出している上乳や乳輪、乳首も、朝と変わらぬ色つやを放っていた。『さよなら』気味の豊胸は爽やかなミルクの香りを放ちながら、自分から目を離せない若い男を見下ろしている。

（たつぷり目で犯してよお……婚約者と比べて私のオツパイはどう？ あなたにドピュドピュさせたオツパイを下から見上げるのも興奮するでしょ？）

男を魅了している実感からくる、背筋の妖しい寒気を感じながら脱衣を続ける。

ナース服の上着のボタンは下腹部の辺りの物を残してすべて外し、半脱ぎとなった。

タイトスカートを、ブラと揃いの黒レースショーツの船底が見えるまで大胆にまくり上げ、夜空色のガーターベルトストッキングの下半身を露わにする。

そして、彼が股間と、形よく膨らんだムチムチ太腿に視線を移したのを見届けると、ストリップパーの仕草で片足ずつ上げ、ショーツを脱ぐ。脱ぎたてのホカホカ下着を頭のすぐ横に放つてやると、ギラギラした目で軌跡を追われた。

「だめ。こっちを見て……そんな布切れより、もっといい物があるわよね」

若い娘ならば絶対にやらない恥ずかしすぎるガニ股で、ベッドの上で上体を起こしている彼の腰を跨ぐ。胸を張り、尻を突き出し、乳房と尻タブがユサユサフルフル揺れる様子を見せつけながら。

ほぼ水平に開かれたガーターベルトストッキングのムチムチ太腿。その中間地点には、

女だけが持つ肉の花が息づいている。

セフレを何人も持ち、セックス経験豊富な亜矢子の秘唇は、同年代の女など比較にならない位に厚い。両の花弁は肉畝と呼びたくなる肥厚ぶり、左右に緩慢に開閉している細い秘裂の奥からはバラ色の肉ビラがほんの少し顔を出している。

女の股間を形作る部品はどれもふっくら肉付き豊かであり、シミ一つないなめらか肌。何人もの男を知り、幾夜も使い込まれてきたにもかかわらず、グロテスクという印象よりも、味わってみたいという欲望を煽る魅惑的なセックス器官であり、実際セフレ全員に変好かれている。

「はああああ……すごい……」

今回の標的も気に入ってくれたらしい。漏れた台詞が嫌悪感の表現でないことは、直下の肉棒が示してくれている。先ほどまで手淫で喜ばせていた逸物は、触れられてもいないのに先走り汁を漏らし続けている。まるで、感動の涙を流している風にダクダクと。「どうせなら、こっちで射精した方がいいでしょ？ 私も、あなたのオチンポをナマで味わいたいと思っていたの」

膝を曲げ、魅惑的な細腰とムチムチした尻タブの位置をゆっくり下げていく。

手首で臀裂に触れながら、後ろ手に回した手のひらは、逆手に勃起を掴んでいる。よく張り出した亀頭の力りに指をひっかけながら固定しているので、狙いを外すことは考えられない。

クチュリ……。

「うあ……あ、あついつ……ヌルヌルで、中がうねっているのが伝わってくる……」
フランクフルトのプリプリ感と苳みみたいな形をもつ穂先が、内外の肉を巻き込みながら秘裂に軽くめりこんだ瞬間、彼は感嘆の呻きを漏らした。

秘唇の内側は心地よく熱い。火傷しそうな肉棒に勝るとも劣らぬ温感で、しかも潤滑油たっぷり。心地よいぬめりを帯びながら、亀頭の先の表面にしゃぶりついてくる。

ジユププ……ジユプウウウツツツ……。

挿入はさらに進む。

「ううっ……オ、おおオオツツツ……！ なんだ、このオマンコ……くおッ！」

亜矢子の肉ヒダは溝が深い。ほとんど使われていないウブな志保の媚肉とは違って力りに引っかかりやすく、擦れる快感は背筋をゾクゾクさせている。

肉質はネットリ柔らかいものの、膣圧は男の握力じみていた。亀頭か竿かを区別せず、表面にぴったり密着しながらグイグイ圧迫してくる。ペニスが蕩けそうな、しかも癖になりそうな悦びで、婚約者と繋がる時よりもふしだらな気分にならせてくれる。

「ううん……ああっ……いいわ、あなたのカリが私のナカを引っ搔くの、気持ちいいわよ、はあん……オマンコ、勃起オチンポの形に広がってるこの感じ、いいっ……ん」

性感帯性器の密着が強ければ、ガニ股で腰を沈める淫乱ナースも悦べる。

両手両足では数え切れない男を経験してきた身にとっても五指に入る巨根は、穂先で閉

じた媚肉をこじ開けながら、楕円気味の自分の形に膣を型どりしていつている。

好きでもない男ではあるが、普段は誰にも触れさせない女の部分に進入されている実感は、ふしだらな快美以外のなにものでもない。心音がドキドキと心地よく加速して、下半身も軽く痺れてくる。

「はあ……あはん……ふう、んん……ああ、根本まで、いくわよ……ん」

快感はペニスに対する愛着を催させ、もっと深く繋がりたいという欲望を沸き立たせる。

（オツパイで感じていた時も悪くなかったけど……思った以上に楽しめるのかも……あの濃い精液をオマンコに浴びたら……さぞ気持ちいいでしょうね……）

パイズリで放出させた黄ばんだ汁のことを思い浮かべると、背筋がゾクゾク粟だつてくる。あんなものを膣奥に注がれたら、どんなに気持ちがいいだろう？

ジユプンンッ！

「んん……はああ……全部入ったわね……どうかしら、私のオマンコ、ふうっ」

下半身をM字にし、ガーターベルトストッキングの太腿をムチムチ膨らませながら、亜矢子は彼の下の腹部に巨尻を置く。

無毛の肉畝とペニスの根本が密着している。挿入途中で押し出された甘酸っぱい欲汁は双方の股間に広がって、ベチャベチャに濡らしてしまっていた。秘唇を内側にめくりながらペニスが女壺に食い込んでいる様は丸見えで、他の女と一つになっている現実を彼は血走った目で見詰めている。



「聞くまでもないかしら……だって、あなたのオチンポ、私のナカでビクビク暴れているんですもの……手コキしてあげた時以上に跳ねて……フフ、とてもイキがいいのね……私のオマンコに精液ビュルビュルしたがつているのがわかるわ」

折り曲げた膝に添えていた両手を後ろにつき、背中を後傾させる。股間を持ち上げ、合体している様子をよく見せつけながら言葉を続けた。

「あなた、薬指に立派な指輪をしてるじゃない……婚約者がいるのよね。パイズリされていた時、志保って口走っていたけれど、私の同僚の佐原志保のことなんですよ?」

鼻の下を伸ばしていた義夫が、ハツと顔を強張らせた。

同時に勃起が勢いをなくし、膣の中でゆっくり収縮していつている。

(だあめ。萎えるのなんて許さないわよお)

ジユプツ、ニチュツ……クイツクイツ……。

背中を傾けた状態で、亜矢子はゆっくり腰を上下動させる。

「ん……はああう……ち、チンポが……フェラされてるみたいに……!」

「そうよ、オマンコフェラでえ、んっ、んっ……たっぷり感じなさいね」

肉棒の表面全体を余すことなく磨き抜きながら、キスの雨を降らせるように子宮口で亀頭の先を軽くノックする逆レイプピストン。

いやらしい水音を奏で、豊胸をゆっさゆっさ揺らしながら、二度三度と続けていると、萎えかけたペニスが再び力を取り戻し、これまで以上に硬化した。再び膣内にミツチリ収

まり、内側からグイグイ押してくる。

(どう？ もうあなたは私から逃れられない……私の思っ壺なのよ)

思い通りに勃起に導いた爽快な支配感を覚えると、髪をかきあげて汗で煌めく無毛の腋の下を見せながら言葉を紡ぐ。

「んフフ……………あの子、自分の机にあなたの写真を飾っているわよ。公私の区別をつけられる出来たナースだから、普段はフォトスタンドを伏せているけれど、休み時間になると上げてるの。それは愛しそつに見詰めているわよお……………その時にはね、仕事中はしない婚約指輪も今のあなたがしているのと同じ場所にして、うれしそつに撫でているのよ」

後傾姿勢の亜矢子は、ベッドのスプリングも利用して腰を振り続ける。一度もつつかえず、ペニスをすつぽぬけさせることもなく、男性経験の豊富さを滲ませる器用な連続ピストンで責める。

肉棒を頬張る肉敵も、はみ出す小陰唇も、全体を愛液で光らせていた。中へ外へめぐりながら出入りしている牡欲の権化は、汁でぐしょ濡れになりながら、血管をビクビク脈打たせている。

恋人の愛情を教えているというのに、彼は他の女の女壺に興奮し、婚約者だけに挿入すべきペニスをいやらしく膨らませてしまっている。揺れる巨乳にもご執心で、瞬きといふ言葉さえ忘れていた風だった。

「なのに、他の女とこんな淫らなことをしてどんな気分？ 欲望たっぷりにオチンポガッ

チガチにして、悪いと思わないの？」

「それは……くうっツ……そんなこと、今になって言わないでくれよ……はあ、はあ、誘ったのはあなたじゃないか……っうっ」

とうとう自分も腰を上下に動かし始めながら、丁寧語を崩してきた。

能動的な迎え腰が加わったことで、膣の擦れも子宮口の圧迫もいっそう甘くなる。

「その通りよ。あんっ、んん、誘ったのは私……でもね、誘惑を受け入れたのはあなたなのよ？ 被害者ぶらないでよ、ね、んっ」

「それは……ううっ、そうだけど……ああッ」

「勘違いしないで。別にあなたを責めているわけじゃないわ……はあっ、はあ……ただ、浮気を楽しみましょうって話なのよ……知らないでしょ？ 婚約者のことを、志保のことを想いながら他の女とセックスするとスゴク気持ちいいのよ？ 私も、恋人がいる男とエッチするのに興奮する変態ナースだから、あなたに近づいたわけ、ああん、オチンポ気持ちはいいん」

ヌッチャヌッチャという抽送音だけでなく、ベッドのスプリングの軋みも響かせながら、亜矢子は後傾騎乗位ピストンを繰り返す。

啞えこむ秘裂はだらだら愛液を流していた。標的の女の愛液が染み込んでいるはずの牡の欲望器官をすっかり覆い、鈍く光らせている。

「さあ、言つて、『志保さんごめんなさい、他の女とセックスしてチンポ硬くしてごめんな

さい』

つて」

「そんなこと、言えるかつ、は、恥ずかしすぎるう……………やっぱり俺がしてるのは浮気セックスで、はあはあ、彼女を裏切っているのに……………つく、ああ」

「はあ、ンンっ、や、ヤセ我慢してもダメよ。何度だって言うけれど、あなたのオチンポは私のオマンコのナカ……………はふう、ああン、いやらしいことを言うようにならぬようにお願いした時、ビクビクって反応していたのに気づかないはずじゃない。本当は言いたいんでしょ？ 言つとすぐく気持ちいいの。恋人と普通にセックスしているだけでは味わえない背徳の快感よお」

亜矢子はゆったり上体を起こす。

無駄なあがきをしつつも屈服したそうな彼の顔を見下ろしながら、背筋を伸ばしていく。重力に逆らって前方に張り出す肉釣り鐘を緩慢に揺らしながら、垂直騎乗位体勢になる。

「ほらあ、言ってしまいなさい……………言ってしまえば、私とのオマンコ、もっとよくなるわよお、ンン、はあう……………うふうンンッ」

薄生地パジャマの太腿を後ろに回した右手で掴み、空いている左手で自分の左乳房を下から揉みながら、上下のピストン腰を開始する。

ジュプツ、ジュブウツ、ヌジュ、ジュ、ズツズツズツ、ヌップヌップ。

「くああっ、はああ、ー、これっ、堪らないッ、気持ちいいいい……………！」

ヌルヌルの膣ヒダで、ペニスの隅々を上へ下へと隈なく擦られる快感。下腹部で肉畝の弾力を味わわされる悦楽。

亀頭の先端を子宮口に吸い付かれる牡悦。

同時に味わわされう男は、あられもない嬌声を張り上げる。

「気持ちいいでしょ？ 浮気セックス最高でしょ？ はあ、ああん、あなたのチンポ、私のナカで暴れているわよ？ ほらあ、言いなさいっ、でないとやめちゃうから。中途半端でやめるなんて我慢できるかしら、ウッフ……」

「ああ、い、いやです！ はああ、ああ……言うから、言いますからあッ、くうッあ……し、志保さあん、ほかの、女の人とセックスしてごめんなさいい、浮気エッチでチンポ硬くさせてえ、すみませんっ！」

叫んだ瞬間、彼の腰も尻も大腿もけたたましく痙攣した。

婚約者でもない女の膣に包み込まれるペニスも、狂ったように暴れ内部全体を揺すぶった。先走りの淫欲汁をぶちまけて、性器同士の研磨快感をいっそう甘美にする。

「ウッフッフッフ、どう、本当に気持ちいいでしょ？ 私もよ。あの子の……志保のカレを食べちゃうセックスに感じてしまっているの。わかるでしょ、ねえ？ あなたのオチンポがギュウギュウ密着しているから、私のオマンコがいやらしく狭くなっているの、バレてしまっているわよね」

「は、はいっ、俺のチンポを、どんどん締めてきてますっ、あああ、すごいっ、こんな快

感、志保さんとのエッチでは感じたことがない……くふうあア！」

「胸がドキドキチクチク痛気持ちよくて、食べられちゃってるオチンポ、射精したくて堪らなくなるのよねえ、わかるわよお、ンン、ああ、まだ硬くなってるう」

セフレの中には恋人や家庭を持つ男もいた。ベッドの上で感極まった彼らがよく本音を吐露しているので男心はよくわかる。

もつとも、女の自分の心臓も心地よく早鐘を打っている。背筋にはゾクゾク甘美な寒気も降り、乳首などは芯が入った風にしこり勃っていた。

同じような背徳快感はわかるので、男だから女だからと言うのは関係ないのかも知れない。間違いであり、裏切りそのものでもある不義のセックスとは、こんな蜜のような悦びを伴うものなのだろう。

（恋人同士では味わえない快感に、たつぷり乱れちゃいなさい……あとで教えた時、志保が強いシヨックを受ける位に欲望全開で、最高にみつともなくね……アハハハハハ！）

セフレたちも味わってきた子宮口のコリコリの感触で、亀頭の先を何度も叩き歪ませながら、獲物の頸動脈に牙をたてるトラの目つきで彼の顔を見る。

「見てえ、同僚の男に跨がって腰を振る私のオッパイ……乳首ピンピンでしょ？ あなたのチンポをオマンコでしゃぶってる内に勃っちゃたの、ンン、ああ、転がすとお、背中にビリビリくるう、オッパイも気持ちよくなっちゃううん……！」

下乳を掬い上げる格好で、男の手でも覆いきれない肉釣り鐘を揉みたてる。長い中指の

先は、グミのような円柱形になった乳頭を左右に転がし押し倒す。

まっすぐに伸びた背中だけではなく、乳首も、肉の釣り鐘全体にも甘ったるい愉悦波動が広がって、心臓の鼓動がドキンドキン早まっていく。

ガーターベルトストッキングの穿き口の先も、露出している太腿の付け根も、股間全体もどンドン汁濡れてしていく。男に腰を振りながら胸を責める快感はえも言われず、愛液はひっきりなしに溢れてくる。

「あ、はああ、すぐく、いやらしい……ああ、勃起が止まらないっ、浮気相手のオマンコに、射精したくなるうう……！」

騎乗位ピストンしながら胸まで弄り始めた淫乱ぶりを、彼はギラギラした目で見詰めていた。犯されながら視姦するのは相当な快感らしく、興奮しきった肉棒は今にも弾けてしまいそう。

ギシッ、ギシッ、ギシギシッ！

墮ちるところまで墮ちたのだから、もう我慢はしたくないとも思っているのか。こちらのピストンに同調するリズムで自らも腰を突き上げている。

泡立ち始めた股間で鳴る汁の泡立つ卑猥な水音と、耐久性が取り柄の病院ベッドのスプリングがせわしなく軋み響く音が病室に木霊する。

出入り口が開いているので、音は廊下に漏れているかも知れないと言つのに、彼はまったく頓着していない。

「いいのよ、射精して、志保だけにあげなくちゃいけないあなたの精液、私のオマンコにたっぷり注いでいいの、はあ、うん、すぐく気持ちよくなるわよ、さあ、思い切り出して、遠慮しないで……！」

たらしこんだ肉棒が射精寸前の痙攣を起こし、膣内を揺すぶってくるのを感じながら、阿る風に背徳の膣内射精を促す。

「うあああ、ああ、出しますっ！ あなたのオマンコに、射精します！ うん、志保さんごめんツツ！ もう、やりたくて堪らないんだ！ こっでやめるなんて考えられない、俺、浮気中出します！ 同僚の看護師さんで膣内射精します！」

「ああン、いいわ、いい台詞よ、いい気持ちよ！ さあ、たくさん出して、婚約指輪をしながら、病院のベッドで他の女に中出ししてえ！」

ナースの激務で鍛えられた足腰のバネを駆使して、単純だが体重を乗せた強烈な上下ピストンを繰り返す亜矢子。義夫も手足を投げ出しながら腰を振りたくる。

性欲旺盛な恋人同士の騎乗位性行じみた浮気セックス。甘酸っぱい愛液の匂いと、鼻にツンとくる汗の匂いが周囲に撒かれ、他に誰もいない病室に充満している。

「ああ、出るっ、出るうう……くうあ、そ、それ……ああ、それダメえッ」

婚約者のいる若い男が、他人には決して聞かせないような無様な弱音を吐いた瞬間、亜矢子は思い切り腰を下ろした。全体重を込めた一撃でドツシリ腰を落ち着かせると、その場で尻をグラインド。背徳セックスの快感によっていやらしく収縮する肉壺で、子宮口に

刺さった亀頭の先ごとペニスを根本から抉り擦る。

尖り乳首の肉釣り鐘を振り回すようにピタンピタン揺らしつつ、無数の太い血管が脈打つ表面にも、いやらしい快感の固まりとなっている棒の内部にもとどめのトリガー快感を感じさせ、

「うああ、アツ、アツ……で、出るう……出るウウううああアアアアア……！」
ビュクツ、ビュルルルル！ ビュルウウウウウ……！！

股間同士が密着し、亀頭の先が子宮口の先にめりこんだ状態で、射精が始まった。

ギョツと目を閉じ、唇も強く合わせた堪らなそうな悦び顔で、彼は汚らしい粘液を遠慮なく注いでくる。

「くうっ、ンンンン、はああっ、いいわ、熱くて濃くて……ああ、朝のと同じ、いいえ、それ以上にイキのいい精液きてるわあ……！」

朝に続き、またしても恋人のいる男を射精させた妖艶ナースは、腰のグラインドをやめた。うっとり睫をおろしつつ、厚ぼったいツヤツヤ朱唇を引き結び、膣内射精される快感をじっくり味わう。

解放された欲望汁は、膣の内側に張り付いてとれなくなるような粘着感を感じさせた。マグマを連想させる熱感もあり、朝に胸や顔に受けたものと遜色ない。禁欲していたこともあるだろうが、元々精力は強い方なのかも知れない。

「ああ、オマンコ、ドロドロになってるわあ……この感じ、いい……っ、ンン、はああ、

うふうんんん」

背筋を伸ばし、乳房を揉みかけた格好で静止する亜矢子は、熱い吐息をこぼす。

亀頭を抱きしめている子宮口も、ペニスと密着している肉ヒダの隅々も、志保も味わっているであろう濃厚精液で灼かれ、染められる快美だが、射精痙攣の振動で媚肉が揺すぶられるのも快感だった。膣内が細胞単位でシェイクされ、目の前が真っ白になる悦びを味わせてくれる。

射精を受けているだけで、四肢から力が抜けていく。顎も脱力してしまい、口の端からはしたない唾液の筋が漏れてしまう。

「はああっ、うん……………ああ、いいわあ……………この中出され感、堪んない……………」

(射精されただけで軽くイっちゃったかも……………ああ、志保を八めるのに利用するだけじ

や少し惜しいかなあ……………罪悪感の首輪をつけて、ペットにしてもいいかしら……………)

ひとしきり注ぎ込んだ後も力を失わない持続力も魅力的だった。

こちらの追加刺激なしでもあと何回かはドクンドクン注いでくれそうだが、それを終えても萎えなような生命力を感じる。

セフレとして困い、都合のいい男として賤れば、セックス好きの自分を相当楽しませてくれるかも知れない。

別れさせた後、元カレのセックス奴隷ぶりを彼女に見せつけてやるのも面白い。

婚約指輪をする若い男が必死になって腰を振り、他の女への膣内射精快感に夢中になっ

ている様子を見下ろしながら、亜矢子は考えるのであった。

この体験版はここまでとなります。続きは製品版でお楽しみ下さいませ。
ご購入いただき誠にありがとうございました。

「ご挨拶」

この度は、ご購入くださいますして誠に有難うございます。
気分転換、活力復活、ぐっすり眠れる等の効用が現れれば幸甚です。

「製品版と体験版の相違点」

体験版の挿絵はモノクロですが、製品版はカラーとなっております。
この他に違いはございません。

一部の体験版は分量が製品版の半分程度です。

「ご注意ください」

- ・PDF閲覧ソフト（Adobe Reader 7、9～11で確認済み）
によっては「見開き」で見る際、ページが右から左へ進みます。
- ・本製品はフィクションです。個人の範囲でお楽しみ下さい。

挿絵はメーカー様の利用規約に基づいて

「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」（G・J?様）と、
「あなたの知らない看護婦 ～性的病院棟24～時」（G・J?様）
を利用して作成しました。
尚、当サークルはG・J?様とは無関係です。

『佐野俊英があなたの専用原画マンになります』
利用規約に基づく表記 シリアルコード S/N:GJ0079908

「ご意見、ご感想をいただけましたら幸いです」

（2013年2末日現在）

- ・夜山の休憩所のブログ <http://kimoriyamasuidou.blog115.fc2.com/>
- ・夜山の休憩所のBlog <http://b.dlsite.net/RG11385/>
- ・ツイッター <http://twitter.com/kimoriyamasuido>